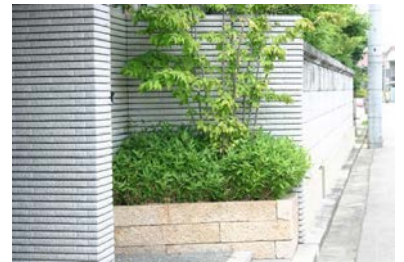




ヒカゲチョウはナミヒカゲともよばれ、その名のとおり、このチョウは好んで林縁などの日陰で過ごします。幼虫の食草がメダケ、クマザサなどのタケ、ササ類で、その植生に依存して幼虫時代から日陰の多い環境で生育、チョウとなってからは樹液、果汁、獣糞などに集まる習性があります。今はやっていませんが、ギフチョウの飼育をしていた頃、野外からエサのヒメカンアオイを採取する際にその葉っぱの裏に下垂するヒメヒカゲの蛹を偶然見つけたことがあり、幼虫が食エサ植物から離れた場所で蛹となる習性もあることを知りました。

写真は権現ダム周回道路一帯を自転車に乗ってチョウ探索をしていた際、路傍の獣糞を夢中で吸っている場面に出食わして、じっくりと接近撮影したものです。よくみれば後翅に連なる複数の眼状紋周囲と外縁を飾るようにブルーの鱗粉をちりばめていてとてもおしゃれなデザインの持ち主です。道路から奥は林床にササ類が繁りコナラなどの広葉落葉樹が林立する木陰の多い環境で、林内にも複数頭が飛び交っていました。

松波町近隣にはこのような環境がなく、ヒカゲチョウが発生するとは思えないのですが、2006年7月の暑い日中、木曾町の人家玄関先にコクマザサの植え込みがあって、その周りを飛ぶやや羽の汚損したヒカゲチョウの姿が目にとまり、なんでこんな街中にと注意してみたら日陰となった葉裏に卵を産みました。こうした笹の類はこの家のほかには見られない完全な街中での観察。さらに、この家は決して新築ではなく笹もかなり前からあるわけで、どういう経緯でヒカゲチョウがここを訪れたのか。ユキヤナギで発生を続けているホシミスジの場合と同様、移植された時点でヒカゲチョウの卵か幼虫がついていたとしても、いったい何時ごろからなのか、そうでないとしたらどこからか笹の香りをかぎつけて飛んでやってきたのか。周辺一帯にチョウのエサとなる樹液環境もなく、いったいどのように命をつないでいるのか、1頭だけでひっそりと産卵活動をするチョウがとてもいじらしく思えました。その後の経緯観察はできていませんが、継続発生した気配はありません。現在、松波町周辺にはコクマザサの植え込みが多いのですが、チョウとなつてからのエサ場がないのでヒカゲチョウが生息する条件は整っていません。



ヒカゲチョウは別名ナミヒカゲとよばれるくせに、その生息分布は、世界中で日本にだけ生息する特産種で、中国、四国、近畿には普通、それより北の本州では東北地方で陸央部だけとせまり、九州は北部に局地的に生息し、北海道や九州南部以南にはいません。ヒメヒカゲの発生時



期にはケネザサの多い場所で必ず新鮮個体に出会えます。